状況から未来へ
そして僕達とは!!

ぼくら「科学論研究会」は、日大・東大闘争につづいておこってきた科学技術の質的に変る未来に備えるようにはかりサークル運動を展開していきたい。そのすべて未知なる課題を、どこまでも現実自身のものとして意識していくが、まずはサークルをつくり始めた後述の課題であり、それこそがこのサークルの目的でもある。

科学とは？

科学にかせられた課題は、たしかに人類の不断の拡張であろう。それは事物的に対象的に発展であり、自然の神秘の解明であり、宇宙の謎への挑戦である。しかし、この科学における問題は、分割に見せられた所の目的性であり、けして現在ぼくらに迫かまている立場をそして日本における、あるいは世界における状況をけして切りひらくことのできないものである。それは机の前に、不眠い本をひろげ、けして体験からなしうることのできない科学の小ッ子である。

しかしながらぼくらにとって科学への認識は、巨大な未知の世界へ挑戦しようとする、仕事の新しいひとつとしての科学における「強迫観」から出発のである。それは、「…」その「良い」「悪い」を問わず、まぬこの世界のにおいであり人間の創造であるといった問題はすでに前半における科学の問題をかくすことを全く無視している。アポロにおける科学者達、すべて米国の戦争のためであり、すべて彼ら帝国主義者の利益でしかない。（問題ことは、り量における科学にそなえる。）「自然」からの「科学」の自立こそ、科学にかせられた課題であろう。

「全体的」から「科学論」

68年、69年大学闘争の中で、とりわけ日大・東大闘争の中で提起してきた科学技術主義の問題性は、大きくその前提を70年以降に置き、70年安保にかけた大衆運動の質を大きく盛り上げようとしている。つまり「70年闘争」とは、単に「帝国主義的」あるいは「米帝のアジア侵略反対闘争的」といった政治課題から出発して「日本革命」「アジア革命」といった政治主義に陥ちこむのでなくして、大学闘争の「質」つまり現代社会内的なものとして「科学論」「女性論」の革命的問題をせまるものである。まさにこのことによって、その時日大・東大闘争にみられたノン・セクトの質の拡大はありえるし、世界的レベルの上昇の一歩をふみこむことができる。しかしまた諸政党セクトやラジカルな政治人の問いかけは、ぼくらは無視することはできず、また、その中からぼくらがうけいれるものは何であろう。つぎにぼくらは、この問題を「科学論」とかと、「…」した地点をふまえてみたい。

科学論の課題

[illegible]

自然からの活動

[illegible]

科学論研究会 新入会員募集！

連絡先　山田哲男（日大理・4年）TEL 045-571-5640，牧内克信（同）TEL 700-6622（内線）